

内容と能力を重視した 日本語教育へ向けて

—中国語母語話者向けの
新しい日本語教材の開発研究事例

曹 大峰

◆要旨

外国語としての日本語教育では、教科書の役割は大きい。特にグローバル化が進む今日、海外の日本語教育では内容と能力を重視した「適切な」日本語教材の開発が求められている。本稿では中国における新しい日本語教材の作成実践と研究活動を事例として、教育部「十一五企画」教材出版計画に採用された大学専攻用の『基礎日本語シリーズ教材』の開発方針と内容構成を中心に、中国人学習者のレディネスとニーズを考慮した新しい教材開発の試みを報告し、内容と能力を重視した日本語教材のあり方を考察する。

◆キーワード

教材開発研究、内容重視、能力養成、漢字圏学習者、中国事例

◆ABSTRACT

Textbooks play a great role in Japanese education as a foreign language. The compilation of appropriate textbooks valuing content and ability is demanded in Japanese education abroad, especially in today's globalizing world. In this paper, the attempts on new textbooks considering the readinnes and needs of Chinese Japanese Learners are reported. The policy and contents of "the basic Japanese textbook series", which are brought into the 11th Five-Year Plan of the Ministry of Education of China, is discussed, as a case study of the compilation and research on Japanese textbooks in China. The ideal condition of Japanese textbooks valuing content and ability is also discussed.

◆KEY WORDS

compilation of textbooks, content, capability, Learners in the Cultural Circle of Chinese Character, case study in China

The Japanese Education Valuing
Content and Ability
A study on the compilation of new Japanese
textbooks for Chinese Japanese Learners
DAFENG CAO

1 はじめに

外国語としての日本語教育では、学習環境と教師構成^[註1]の事情により、教科書の役割は大きい。特にグローバル化が進む今日、海外の日本語教育では内容と能力を重視した「適切な」日本語教材の開発が求められている^[註2]。

このような時代要請に応じて、中国では新しい日本語教材の作成実践と研究活動が行われているが、一例として、筆者が所属する北京日本学研究中心では、中日両国の大学や教育部門の研究者の協力により、「中国の日本語教育における主幹科目「総合日本語（精読）」に関する総合研究」や「中国の日本語教育のための新しい教材像に関する研究」の成果を土台に、教育部「十一五企画」教材出版計画に採用された大学専攻用の『基礎日本語シリーズ教材』の開発プロジェクト^[註3]が実施されている。

本稿では上述の大学専攻用『基礎日本語シリーズ教材』の開発方針と内容構成を中心に、中国人学習者のレディネスとニーズを考慮した新しい教材開発の試みを報告し、内容と能力を重視した日本語教材のあり方を考察する^[註4]。

2 教材開発の理念と方針

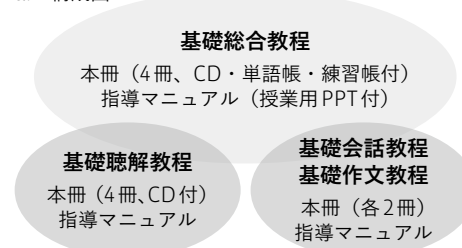
これまでの中国の大学の日本語専攻では、文法中心と教師中心の教授法により「精読（総合日本語）」という授業に比重が置かれ、「会話」や「聴解」などの科目との整合性が配慮されなかった。そのため、教師の教授経験や能力によって知識の学習と技能の訓練には一定の効果が果たされていたが、しかし、国際化時代や多文化社会を迎え、異文化コミュニケーション能力を持つ人材が求められるようになった今日では、これまでの教授法と教材は新しいニーズに合わなくなり、多様化しつつある学習動機や学習スタイル、急増する新設学科の経験不足などに対応できるような、内容と能力を重視した新しい日本語教材が求められている。そこで、われわれは上述の教材開発プロジェクトにおいて、次の目標と方針を立ててきた。

- 「総合日本語」（従来の「精読」）だけでなく、「聴解」、「口語」、「作文」という多科目に使用する教材のシリーズ化によって、科目間の連携と相乗的学習効果を図り、総合的な日本語能力の養成をめざす。
- 多文化社会に実在する話題と多様性のある視点を盛り込み、大学生の知的レベルにふさわしい内容（トピック）と教室活動（タスク）の展開により、日本語による理解力・思考力・表現力・共生能力を養成する。
- 外国語学習のプロセスとストラテジーを配慮し、科目別に適するタスクチェーンの導入によって文法中心と教師中心の教材体系を改革し、自主的で協働的・創意的・効果的な学習を促進する。
- 最新の言語研究や教育文法研究の成果を取り入れ、漢字圏学習者向けの簡易な教育文法体系を作成し、その学習項目の配列と教え方を工夫し、日本語専攻の学生として十分な言語知識と運用力の獲得を図る。
- 教授経験や情報の少ない教師でも本教材で教えられるように、講義用PPTと学習語彙文法データベース、学生用単語帳と練習帳などを付した教師用指導要領書と学生用付属教材を充実させる。

上述の目標をめざして、われわれのグループは下の構成図（図1a）に示されたシリーズ教材^[註5]の開発に努めているところであるが、すでに編集が完成し出版されたのは『基礎総合教程』、『基礎聴解教程』、『基礎会話教程』の第一冊と指導マニュアルなど併せて6冊である。

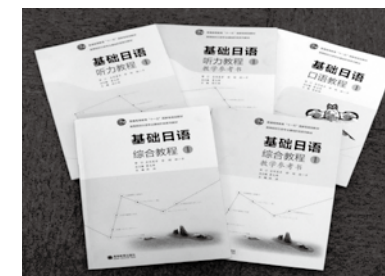
図1 大学日本語専攻用『基礎日本語シリーズ教材』

a. 構成図



中国高等教育「十一五」企画教材出版計画（2006-2011年）

b. 表紙



次節から、具体的にそれらの教科書の内容と特徴を紹介し、考察を深めていきたい。

3 主幹科目の内容と効果を根本的に改善する『基礎総合教程』

中国の大学の日本語学科では、「総合日本語（精読）」という主幹科目があり、学習時間が最も長い（4年間平均毎週に6-8時間ほど）ので、重要な役目を果たすものとして位置づけられてきた。本シリーズ教材においても、この主幹科目で使う『基礎総合教程』の教育内容と効果を重要視して、これまでの内容の問題（日本の小中学生程度の内容）と効果の問題（文法中心と教師中心で応用に向かない）を根本的に改善しようと努めた。まず、内容のほうでは、「大学生の知的レベルにふさわしい内容（トピック）」を目標に、日本を中心に中国や世界の問題を精選し、20ユニットにして4冊で60課の内容が構成された（表1）。

また、新しい理念と方針による教材の教育効果を図り、カリキュラムの時間配分にそって内容の理解と応用を目標とする学習ステップを教科書に組み込み（表2）、ステップ1とステップ2ではインプット、ステップ3ではインプット＋アウトプット、ステップ4ではアウトプットという学習プロセスを明確に、インプットの内容は日本のことを中心に、アウトプットの内容は中国のことを中心にというように、協働的教室活動の目標を立てて、観察-発見-整理-チャレンジのタスクチェーンを通して学習者を中心とする学習活動を導くようにしている。

本教材では上述のように話題先行のタスク型の学習モデルを提唱しているので、文法教育に関しても、それに合わせてコミュニケーションのための教育方法を再構築しようと多数の試みを導入している。たとえば、学習項目の配列はトピックの内容に即して出現の順序を調整したり、学習目標を理解と産出の二段階に分けて設定したりすることによって、初級でも大学生の知的レベルにふさわしい学習内容に触れることができるようにしている。また、主教材に発見学習と知識整理のタスクを設定し、文法解説を指導マニュアルに移して解説内容を「基本-例文」と「提示-例文」に分け、学習者の状況によって教師が指導すべき項目と程度を選択できるようにしている。それから、自己評価機能を

表1 『基礎総合教程』の話題構成

第一冊	UNIT 1 大学生間の情報交流	第三冊	UNIT 11 風景と心
	1 ネットミーティング		31 遍路道
	2 中国にもありますよ		32 近江八景と瀟湘八景
	3 いろいろな「一番」		33 エンルムの春風
	UNIT 2 中日両国の日常生活		UNIT 12 外見と心
	4 一日のスケジュール		34 外見と中身
	5 交通機関と道案内		35 いろいろな人物描写
	6 買い物		36 名作に描かれる人物像
	UNIT 3 大学生活		UNIT 13 ふれあいとつきあい
	7 大学の勉強生活		37 いろいろなふれあい
	8 先輩へのインタビュー		38 自然とのふれあい
	9 アルバイトとボランティア活動		39 人とのつきあい
	UNIT 4 言語学習		UNIT 14 ビジネスの現在時
	10 外国語の学習法		40 日本のものづくり
	11 中国語の漢字と日本語の漢字		41 日本企業の中国進出
12 和語、漢語、外来語のイメージ	42 経済のグローバル化		
UNIT 5 趣味と嗜好	UNIT 15 できる仕事と仕事のできる人		
13 「三種の神器」	43 仕事と生き方		
14 ユニークなコレクター	44 仕事の現実		
15 サークル活動	45 希望の仕事につくために		
第二冊	UNIT 6 動物と人間	第四冊	UNIT 16 人類の財産アーカイブズ
	16 動物との会話		46 アーカイブズの施設と定義
	17 動物への思いやり		47 アーカイブズに携わる人々
	18 動物との共存		48 アーカイブズの未来
	UNIT 7 都会と田舎		UNIT 17 現代の若者
	19 あなたは都会派？ 田舎派？		49 ストレス
	20 私のエコライフ		50 いろいろなボランティア
	21 住みよい社会の構築		51 消費社会の若者たち
	UNIT 8 生活と健康		UNIT 18 数字で納得させる
	22 朝型人間と夜型人間		52 アンケート入門
	23 スポーツと健康		53 グラフを読む
	24 保健と健康		54 統計の応用
	UNIT 9 世界遺産と現代文明		UNIT 19 漢字のチカラ
	25 地球上にある世界遺産		55 ネーミング
	26 負の遺産・無形遺産・危機遺産		56 日本人の漢字受容史
27 消えていく世界遺産	57 漢字圏		
UNIT 10 飲食と文化	UNIT 20 22世紀のロボット		
28 日本の食事の伝統と文化	58 鉄腕アトムは泣いている		
29 中国の食事の伝統と文化	59 ロボット工学史		
30 食文化の広がり	60 ヒューマノイドロボットが好きな日本人		

表2 理解と応用を目標とするステップ

UNIT 1 大学生間の情報交換		
第1課 ネットミーティング	第2課 中国にもありますよ	第3課 いろいろな「一番」
1.自己紹介をしましょう	1.相手国のものを知りましょう	1.いろいろな「一番」を知りましょう
2.相手のことを聞きましょう	2.友達の所在を確認しましょう	2.日本の「一番」を調べましょう
3.家族や友達を紹介しましょう	3.町の絵を説明しましょう	3.比較していい方を選びましょう
4.ネットワークを広げましょう	4.大学の施設を説明しましょう	4.中国や他国の「一番」を紹介しましょう

備えた練習帳や持ち歩きやすい単語帳をつけることによって、自主的自律的学習を支援するようにしている。これらの文法教育の方略的改革とともに、内容的にも現在日本で広く使われている欧米人学習者向けの教育文法と違って、漢字圏の学習者と教師に受け入れ易い教育文法体系が導入されている。

表3、表4にはその品詞体系と活用体系が提示されているが、日本の学校文法と日本語教育文法の長所を取り入れ短所を避けるように多数の研究者による検討を通して立案されたもの^[註6]であり、また、日本語学より日本語教育学の立場に立ち、しかも漢字圏学習者向けに種々の配慮をしたものである。たとえば、動詞の分類は活用の特徴を示唆した漢字名称を受け継ぎ、助動詞は用言を補助する機能を認め、多様な形態素を包括するという学習上の便利さから学校文法の名称を受け継いでいる。活用形は用言自身の変化語形として定義の範囲を学校文法から受け継ぐが、問題となったその名称を簡略化し実際発音したり書いたりする形を名称にすることによって記憶効果を図ろうとした。また、表現形式の組み合わせによって実現する基本的な意味機能も「日本語教育文法」の成果を吸収し表に入れたものである。

4 言語活動の特徴と相乗的学習を配慮した技能別教材

本シリーズ教材では、主幹科目の教科書と並んで、聴解、会話、作文などの科目の教科書も同時に開発し、技能別の言語活動の特徴と相乗的学習効果を配慮するようにしている。

表3 漢字圏学習者向けの品詞体系

日本語名	名詞		動詞		形容詞		副詞		助詞														
	普通名詞	固有名詞	代名詞	数詞	形式名詞	五段活用動詞	一段活用動詞	変格活用動詞	イ形容詞	ナ形容詞	情感副詞	程度副詞	陳述副詞	連体詞	接続詞	感動詞	指示詞	格助詞	並列助詞	提示助詞	副助詞	終助詞	接続助詞
	自立語										付属語												
中国語名	独立詞(実詞)										附属詞(虚詞)												
	普通名詞	专有名词	代词	数量词	形式名詞	五段变化動詞	一段变化動詞	不规则变化動詞	イ型形容詞	ナ型形容詞	情感副詞	程度副詞	陳述副詞	连体詞	连詞	叹詞	指示詞	格助詞	並列助詞	提示助詞	副助詞	语气助詞	接续助詞
① 品詞は形式と意味の特性からまず大きく二分する。 ② 基本的には9種類とし、種類を跨る「指示詞」は別類とする。 ③ 助動詞は学習の便宜上、付属語として次の多様な形態素を含む。a.用言の「複語尾」や接辞にあたるもの(た、う/よう、まい、ない、ぬ(ん)、れる/られる、せる/させる、ます、たい/たがる); b.「判定詞」や複合辞にあたるもの(だ、です、である、そうだ(様態)、そうだ(伝聞)、ようだ、みたいだ、らしい、かもしれない、のだ、はずだ、わけだ、べきだ、ものだ、つもりだ)。																							

表4 漢字圏学習者向けの用言活用体系

活用形	イ形容詞					ナ形容詞					動詞																								
	基本形	変化形				基本形	変化形				基本形	変化形																							
表現形式	い形	か形	かろ形	く形	けれ形	だ形	詞干	だろ形	で形	な形	なろ形	に形	う段形	あ段形	い段形	(音便形)		お段形	え段形																
													一段			い／え段形				十れ形															
接辞・形態素		です	たり	う、	て	ない	ば	です	たり	う、	(は)ない、	(は)		ない	(に)れる	(せ)れる	ます	て	たり	よ／ろ	ば														
文法機能	連体修飾	丁寧体終止	過去	過剰	推量	連用修飾	並列	中止	接続	否定	假定	普通体終止	辭書見出し語形式	丁寧体終止	過去	例示	推量	並列	接続	連体修飾	連用修飾	普通体終止	連体修飾	否定	受動	被役	可能	中止	丁寧体終止	過去/完了	接続	例示並列	意向	命令	假定
説明	① 学校文法の活用体系の短所(活用形の名称の問題)を補い、長所(音韻規則の配慮)を生かすために、形式優先の活用形名を新規導入する。 ② 「日本語教育文法」の長所を生かして、意味・機能を持つ表現形式を軸に、活用体系を整理する。 ③ 活用形は用言自身の語形と定義し、意味・機能を持つ表現形式の基本構成要素(語基)として、「日本語教育文法」の取り扱いと区別する。 ④ 文における表現形式とその意味機能を中心に説明するのが大事、例、受身の表現形式 五段動詞あ段形+助動詞「れる」、一段動詞い／え段形+助動詞「られる」。假定の表現形式 五段動詞え段形+接続助詞「ば」、一段動詞え段れ形+接続助詞「ば」、イ形容詞けれ形+接続助詞「ば」、ナ形容詞なら形直接。																																		

4.1 聴解ストラテジーを体験的に学習できる『基礎聴解教程』

日本語能力試験 (JLPT) の結果統計によれば、漢字圏学習者の聴解得点は欧米系学習者に比べて低いことが目立つ。それは象形文字のおかげで視覚による学習能力が強い代わりに、聴覚による学習能力が弱いことを示唆しているのかもしれない。漢字圏学習者への聴解教育は聴覚による学習能力とコミュニケーション能力を育てることが重要な課題であるに違いない。そこで、本シリーズ教材では、『基礎総合教程』と並行的に使用できる『基礎聴解教程』を開発し、上述のシリーズ教材の理念と聴解教育の課題を踏まえ、従来の教科書には明確に見られなかった聴解ストラテジーをタスクによって全面的に提示し、聴解活動を通して能率的に情報を受容し異文化コミュニケーションを実現する能力を育てようという目標が立てられたのである。

具体的には、聞く活動を人間のコミュニケーション活動の一環として位置づけるように、「前作業 (聞く前) - 本作業 (聞く時) - 後作業 (聞いた後)」という学習プロセスが導入されている。前作業ではウォーミングアップ活動で既習知識の活性化を図り、本作業では7つの聞き取りタスクを通して聴解ストラテジーの体験を積み重ね、後作業では内容の復習や補足をした上に、応用タスクを行うことによって、聴解の質と効果を高めようとしている。

また、『基礎総合教程』に近い内容と話題を数週間遅れて取り上げ、相乗的学習を促進しようとしている。たとえば、第1課から第4課までは『基礎総合教程』の発音篇に後続し日本語の発音を聞く能力を習得させるようにしている。また、第5課から第7課までは『基礎総合教程』のUNIT 1に関連させて表5のような学習目標を立てている。

表5 『基礎聴解教程』の学習目標とその関連性

第5課 自己紹介	第6課 私の家族	第7課 友達
1. 名前・所属・学年・趣味を聞いて理解する 2. 「事前予測」ストラテジーを体験する 3. シャドーイングを体験し、日本語の自然なリズムとイントネーションを身につける	1. 家族の形態・人数・職業・呼称を聞いて理解する 2. 「情報選別」のストラテジーを体験する 3. シャドーイングを体験し、日本語の自然なリズムとイントネーションを身につける	1. 友達の外見・性格・趣味などを聞いて理解する 2. 「後続予測」ストラテジーを体験する 3. シャドーイングを体験し、日本語の自然なリズムとイントネーションを身につける

本教材で体験させる聴解活動とストラテジーは基本的に図2のように2つの種類と5つのパターンとそれらをコントロールする「モニター」のタイプがある^[註7]が、各パターンにおいては多数の目的と場面による聞き取りタスクを導入したものである。

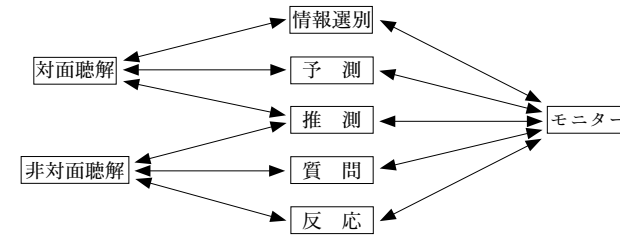


図2 体験させる聴解活動とストラテジーの種類

4.2 口頭表現の場面と行動をモニターする『基礎会話教程』

これまでの会話教材は内容的には場面と文脈の提示が不足しており、学習のプロセスが十分に配慮されていなかった。それで日本語環境が薄い中国の日本語教育の現場では、できるだけ日本人教師に授業をお願いすることによって教材の不足と中国人教員の及ばない点を補うようにしている。しかし、近年急が増えてきた地方大学の新設学科では、すぐに日本人教師が見つかるとは限らず、見つかっても長期的に教職をお願いできる保証もないので、中国人教員でも効果的に教えられる会話教材が地方の大学から強く求められているのである。

そこで、本教材は、なるべく実際の口頭表現の場面と行動をモニターするように、使用場面に結びついた談話や対話を学習内容に盛り込み、文脈を含んだ口頭表現のパターンの発見・整理・応用という協働的学習活動を中心に、「試し→確認→補足→練習→発表→実践」という学習プロセスの導入を工夫し、中国人教師が使いやすい漢字圏学習者が応用しやすい会話教材をめざして開発されている。

また、科目間の連携をはかり、『基礎総合教程』より一学期遅れてスタート

する第一冊では、学校や日常生活という既習の話題を中心に話す活動をより深く展開する構成となっている（図3参照）が、『基礎総合教程』の第三冊と並行する第二冊では、会議やスピーチコンテスト及び儀式などフォーマルな場面の話す活動を中心に、思考力と伝達・応対力の連結を図る学習形態を提示するようになっている。

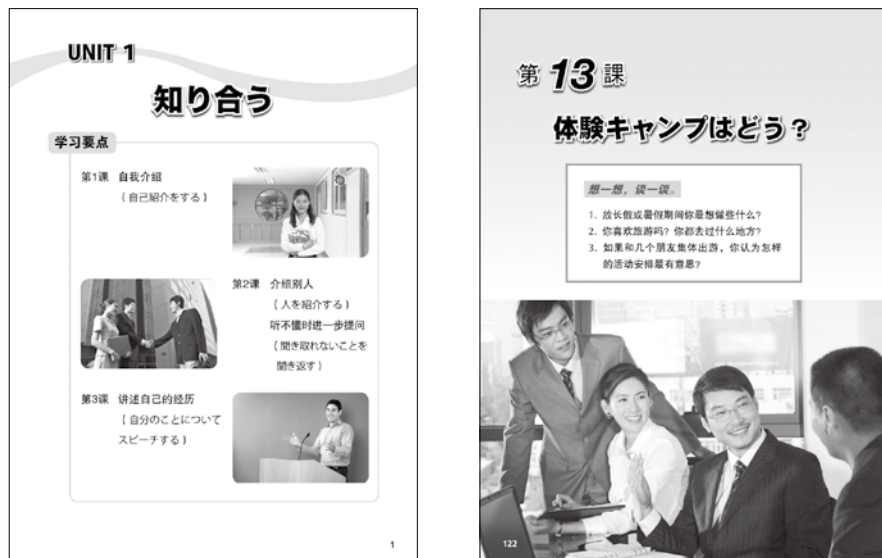


図3 『基礎会話教程』のユニットと課の構成

4.3 自然な文章表現力の養成をめざす『基礎作文教程』

最近中国の大学で毎年のように実施される日本語専攻四級試験では、作文問題の得点が平均的に低くて大学別の得点差が最も著しいものである。これは作文教育への認識不足と大学間の教育レベルの不均衡によるものと考えられているが、具体的には、科目間の連携不足と教材における学習プロセスの欠陥に大きく関わるものと認識することができよう。そこで、本シリーズ教材では、『基

礎総合教程』にある書く活動と関連しながらも、より集約的に自然な文章表現力を養成する『基礎作文教程』を2冊ほど開発するように計画し、現在中日両国の研究者による編集作業が進められている。

本教材では、人間の文章表現活動の一般的過程をモニターして、次のように「書く前→書く時→書いた後」という活動プロセスにそって、教材のUNITと課を構築し、異文化理解を基礎とした自然な文章表現力の養成をめざそうとしている。

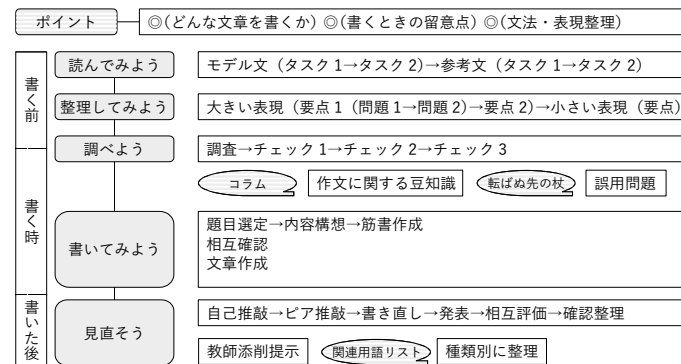


図4 『基礎作文教程』の活動シラバスとプロセス



図5 『基礎作文教程』のユニットと課の構成

5 まとめ

本稿では上述のように、大学専攻用『基礎日本語シリーズ教材』の開発方針と内容構成を中心に、完成した一部の成果出版物の内容を開示し、中国人学習者のレディネスとニーズを考慮して内容と能力を重視した新しい教材開発の試みを報告したが、特に、多文化理解に役立つ学習内容の盛り込み、異文化コミュニケーション能力・主体的学習能力・独自の思考能力を含む「行動能力」の重視、学習プロセスを配慮したタスクチェーンの設計、漢字圏学習者に適する文法教育体系の再構築など、各国の日本語教師と研究者が共に関心を持つ課題に関して、中国での共同研究と実践例を提示して考察を行った。

〈北京外国語大学〉

注

- [注1] …… 非母語話者教師が多い。
- [注2] …… 国際交流基金「2009年海外日本語教育機関調査」結果（速報値）によれば、日本語教育上の問題点として最も多くの機関が回答したのは「適切な教材の不足」、2003年と2006年の調査結果と連続して目立つ問題点となった。
- [注3] …… 中国第11回五カ年建設発展計画（2006-2011）に採用された教材出版プロジェクトで、筆者（編集責任者）を含む中日両国の研究者30数名の共同編集によって4種類で24冊の教材を高等教育出版社から出版する予定である。
- [注4] …… 本稿は本シリーズ教材の開発グループによる実践記録を土台に書き下ろしたものである。主な観点と一部の内容が中日両国の参加者の共同研究によるものであるが、論述の誤りはすべて筆者の責任に帰す。
- [注5] …… 本シリーズ教材は4年制の大学日本語専攻で最初の2年間（基礎段階）に使用するものであるが、その到達目標は日本語能力試験2級程度の知識と運用能力を目安に設定されている。
- [注6] …… プロジェクトグループの会議や高等教育出版社主催と人民教育出版社主催の日本語教育文法フォーラムなどにおける諸氏の発表と参加者の有益なコメントを踏まえて数々の修正を経て立案されたものである。
- [注7] …… 国際交流基金『聞くことを教える』（横山紀子著）に負うところが大きい。

参考文献

国際交流基金（2008）『聞くことを教える』ひつじ書房

- 国際交流基金（2010）「国際交流基金 2009年海外日本語教育機関調査」<http://www.jpfg.go.jp/j/japanese/survey/result/index.html>（2010年11月25日参照）
- 曹大峰（2008）「中国における日本語教科書作成 一歩み・現状・課題一」『言語文化と日本語教育』35, pp.1-9. お茶の水女子大学人間文化研究科
- 曹大峰（2010）「中国における日本語教育の現状と課題」『日本研究』28, pp.489-500. 韓国中央大学校日本研究所
- 曹大峰・林洪・篠崎祺子（2009）「学習者の主体性を重んじた日本語教科書をめざして」《21世紀的東北アジア日本研究論文集》学苑出版社
- 曹大峰他（2010）『基礎日本語総合教程』高等教育出版社
- 曹大峰他（2010）『基礎日本語総合教程・教学参考書』高等教育出版社
- 曹大峰他（2010）『基礎日本語総合教程・練習冊』高等教育出版社
- 曹大峰他（2010）『基礎日本語聴力教程』高等教育出版社
- 曹大峰他（2010）『基礎日本語聴力教程・教学参考書』高等教育出版社
- 曹大峰他（2010）『基礎日本語口語教程』高等教育出版社